

称号及び氏名	博士（言語文化学）	浅見 洋子
学位授与の日付	平成25年3月31日	
論文名	金時鐘の言葉と思想 ―注釈的読解の試み―	
論文審査委員	主査	山崎 正純
	副査	田中 宗博
	副査	西田 正宏
	副査	細見 和之

論文要旨

本論文は、在日朝鮮人詩人・金時鐘の詩集を注釈的読解という観点から読み直したものである。金時鐘は、第一詩集刊行の際から、一貫して「詩集を編む」ということに極めて意識的な詩人であった。また、金時鐘の詩には、過去・現在・未来を同時に描き込み、日常の何気ない光景を切り取った詩でありながら、その詩語の背後に同時代の状況や金時鐘自身の体験、民族の記憶などが織り込まれているという特性がある。従って、本論では、徹底的に詩作品に寄り添うという以下の大原則に立って、金時鐘の詩の読解を試みた。第一に、金時鐘の詩を「詩集」という大きな枠組みのなかで捉え、さらに論じやすい箇所だけを部分的に抜き出すのではなく、それぞれ独自の個性を持った「一篇の詩」として分析するということである。第二に、詩の分析にあたって、一語一語のレベルにまで細部にわたって注視し、様々な歴史的資料や金時鐘の詩の用例を参照することで、詩語にこめられた背景を読みとるということである。第三に、外在的資料を参照しながらも、同時に詩の内在的論理に則して詩を読み解くということである。本論文は、第一部金時鐘論と、第二部金時鐘詩集注釈の二部構成となっている。さらに、資料篇として金時鐘関係資料を加えた。以下、本論文の概略を記す。

第一部は、金時鐘の第二詩集『日本風土記』から、未刊行詩集『日本風土記Ⅱ』、第

三詩集『長篇詩集 新潟』、第四詩集『猪飼野詩集』までを、時系列に並べて論じたものである。

第一部第一章では、『日本風土記』を、ふたつのテーマに分類して論じた。『日本風土記』第一部の「犬のある風景」では、南京虫・犬・ネズミ・蟹・蚊・にわとりなど、様々な生き物が登場する。これに対して、第二部「無風地帯」では、日常の一場面を通して、人為的に設定された様々な境界の揺らぎが描かれることになる。第一節「成立背景」で『日本風土記』の成立背景について確認したあと、第二節・第三節でそれぞれのテーマごとに作品分析を行った。第二節「生命の群落へ ——第一部『犬のある風景』」では、前者のテーマに即した六篇の詩を中心に、金時鐘が描く生き物の意味について考察した。第三節「境界と越境 ——第二部『無風地帯』」では、後者のテーマに則した五篇の詩を中心に、人間世界を覆う境界と、その越境の表現について考察した。そのうえで、『日本風土記』は、第一部で生き物の視点に身を置くことで不条理に満ちた人間社会を相対化し、第二部ではもう一度人間社会を内側から眺めるという構成になっていることを指摘した。さらに、第一部に二篇、第二部に四篇置かれている原水爆の詩に注目し、第一詩集『地平線』から未刊行詩集『日本風土記Ⅱ』に至るまで、金時鐘が一貫して高い関心を示してきた原水爆への批評意識について考察した。

第一部第二章では、『日本風土記Ⅱ』を、ふたつのテーマに分類して論じた。『日本風土記Ⅱ』には、自身の記憶をさかのぼるという太いラインが存在する。その一方で、後の『猪飼野詩集』へとつながるような、猪飼野を中心とした在日朝鮮人の群像を描いた詩篇も数多く収録されている。第一節「成立背景」で『日本風土記Ⅱ』の成立背景について確認したあと、第二節・第三節でそれぞれのテーマごとに作品分析を行った。第二節「よみがえる記憶 ——記憶を語ることの歴史性」では、前者のテーマに則した四篇の詩を中心に分析し、詩にこめられた記憶が、不条理な歴史への怒りとかなしみの表現であると同時に、そのような出来事を二度と引き起こしてはならないという和合の表現としても立ち上がってくることを指摘した。第三節「空想と変革 ——猪飼野の風景と民衆」では、後者のテーマに則した四篇の詩を中心に、猪飼野の人々が厳しい生活のなかで思い描く豊かな空想が、社会の矛盾に抗い、それとは異なる世界の構築を目指す表現となっていることを考察した。そのうえで、『日本風土記Ⅱ』は、過去をさかのぼるという金時鐘の個人史的な主旋律に、同時代の身近な光景を描写しつつ社会を風刺した副旋律が重層的に絡み合っていることを指摘した。

第一部第三章では、『長篇詩集 新潟』（以下、『新潟』）を、配列に則して読み解くこ

とで、三〇〇〇行を超える長篇詩の壮大な構造を明らかにすることを試みた。『新潟』では金時鐘や朝鮮民族の記憶が主要なモチーフとなっている点で『日本風土記Ⅱ』と重なり合うが、『日本風土記Ⅱ』が過去をさかのぼる形で記憶が出現するのに対し、『新潟』では膨大なエネルギーを持った海のリズムに乗せて、時間も場所も錯綜して記憶が出現する。またその一方で、『新潟』には「みみず」に変身した「ぼく」が、様々な経験や葛藤を繰り返しながら、三八度線を越えるために新潟を目指すという大きな軸も存在する。以上の二点が複雑に絡み合っていることが、『新潟』を壮大な構想を持った長篇詩として成り立たせる推進力となっていることを指摘した。

第一部第四章では、金嬉老事件という象徴的事象を通して時代背景を確認したうえで、『猪飼野詩集』について論じた。第一節「金時鐘の日本語」では、一九六八年に起こった金嬉老事件についての当時の新聞報道や在日朝鮮人の反応を辿ることで、冷戦構造のもとで経済的繁栄を享受していた日本人と、民族的求心力が失われたなかでお政治的軋轢に苛まれ、孤立感を深めていた在日朝鮮人との落差について確認した。このような時代背景のもとで、在日朝鮮人の拠り所となる言葉を模索することが金時鐘の急務であり、その成果として『猪飼野詩集』があることを指摘した。第二節「歴史と伝説 ——猪飼野群像」では、猪飼野での個々の暮らしを伝説という形をとって記し、それを詩集に集約することで、国民の歴史に抗う共同体を描き出していることを指摘した。第三節「追憶すること ——〈在日〉の不在感」では、詩集の後半から金時鐘の記憶が過去をさかのぼるように出現し、その記憶が、猪飼野の中心を流れ、生者と死者が出会う場所として存在する平野川へと注ぎこまれる形で詩が結ばれていることを指摘した。

このように、金時鐘の詩を詩集という大きな枠組みのなかで捉え、さらに個別の詩の分析を通して浮かび上がってきたテーマを詩集ごとに大きくふたつに分類することで、これまで明らかにされていなかった視点から詩集の特性を抽出することができた。

第二部は、『日本風土記』・『日本風土記Ⅱ』・『長篇詩集 新潟』について、全文を引用したうえで、金時鐘のエッセイや歴史的資料などを参照しつつ詩の背景を調査し、注釈を付したものである。とりわけ、未刊行のまま原稿が散逸してしまった『日本風土記Ⅱ』は、「金時鐘年譜」（野口豊子編）に記されていた目次と書誌情報の一部を手がかりに、初出紙誌にあたってその復元に努めた詩集である。金時鐘は、一九五〇年代の後半から、共和国及び左派在日朝鮮人運動組織との政治的対立により、激しい批判を受けていた。『日本風土記Ⅱ』は、そのような状況のなかで、組版の段階まで進み

ながらも刊行を断念せざるをえなくなった詩集である。そのため、宇野田尚哉氏（大阪大学）との共同研究によって初出紙誌を調査し、全二九篇のうち二〇篇を復元することができた。また、『長篇詩集 新潟』では、長篇詩の背景を掘り起こすとともに、詩に見出しをつけることで、詩のなかに錯綜して現れる出来事の“記憶の地図”を描くことを試みた。

巻末には、資料篇を付した。「一 文献一覧」では、現時点で明らかになっている金時鐘に関する文献の一覧を、「1 単行本」・「2 作品」・「3 評論」・「4 金時鐘研究」の四つの項目に分類して収録した。「二 詩作品校異」では、金時鐘の詩作品の校異を、詩集ごとに分類して収録した。校異は、雑誌掲載版（再録などを含む）・単行本版・集成詩集版・詩集選版など、現時点で明らかになっている全ての版について、本文の全文にわたって調査したものである。「三 単行本未収録作品」には、単行本に収録されていない詩作品及び童話を収録した。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、在日朝鮮人詩人・金時鐘の詩を、注釈的読解という観点から体系的に読み直すことで、詩作品に用いられた言葉の意味や概念の重層的な構造を明らかにし、金時鐘の詩作品の意義を考察することを目指したものである。言語文化学専攻が定める審査申請要件を十分に満たしており、予備審査及び本審査において厳正な審査を行った。以下、五つの基準に照らしながら、評価結果の内容について具体的に述べることにしたい。

①研究テーマが絞り込まれている。

「金時鐘の言葉と思想 ―注釈的読解の試み―」と題する本論文の中で論者は、金時鐘の第二詩集『日本風土記』・未刊行詩集『日本風土記Ⅱ』・『長篇詩集 新潟』・『猪飼野詩集』をそれぞれ“詩集”という枠組みにおいて全体的、体系的に捉えつつ、詩集・詩篇・詩語のそれぞれの次元を構成する言葉や概念の意味や言説の構造を明らかにし、それらの読み直しと再評価を試みている。そのうえで、分断状況に置かれた祖国の現状とは異なる世界の構築に繋がる意味ある行為として〈在日〉を位置づけた金時鐘の詩作の可能性を追求している。論者の対象に向う姿勢は本論文を通じて一貫し

ており、研究テーマの一貫性を求める本専攻の審査基準第1項を十分に満たしていると判定する。

②研究の方法論が明確である。

本論文は、以下の大原則に立って、金時鐘の詩を注釈的読解という観点から読み直すことをその方法論としている。第一に、金時鐘の詩を“詩集”という大きな枠組みで捉え、それぞれ独自の個性を持った“一篇の詩”として分析するという点である。第二に、歴史的資料や金時鐘のエッセイ・詩における語の用例などを参照することで、詩作品や詩語の意味の重層性を探るという点である。第三に、詩作品内部の論理に従って、詩を内在的に読み解くという点である。このような方法は本論文の目的に照らして適切なものであり、全章を通じてこの方法論が堅持されていることは、第二部で詩集の全文に注釈を付し、第一部ではそれを踏まえて詩集論を展開していることから明らかである。したがって、方法論的確さを求める本専攻の審査基準第2項を十分に満たしていると判定する。

③先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

金時鐘及び、各詩集の先行研究については、本論文の本文および注において、詳細な言及がなされている。本論文によれば、初期の金時鐘研究においては、在日朝鮮人詩人としての金時鐘の詩の特質を抽出する努力がなされる一方で、詩を断片的に引用し政治主義的な論理を展開するという限界がみられた。しかし、金時鐘の証言や散在していた資料の復刻などを受け、**2000**年以降には、それらの新資料を参照することでより具体的・構造的な詩の読解が試みられるようになり、また詩集を体系的に論じるような成果が提出されるようになったとされる。本論文は、金時鐘研究におけるそのような新たな流れの一つに位置づけられるものであるが、詩集全文に注釈を付すという試みをなした点で、新たな方法論の可能性を提示し得ているといえるだろう。また、資料篇には、先行研究を調査し、刊行年月ごとに整理した先行研究一覧を付している。したがって、先行研究に対する知見の深さを求める本専攻の審査基準第3項を十分に満たしていると判定する。

④結論に至る論理の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文は、同時代の資料や金時鐘の詩作品、金時鐘の証言などを参照し、金時鐘の詩作品に関する膨大な注釈を付したうえで詩集の分析を行っており、それらの十分な論拠に支えられている。さらに、そのような外在的資料を参照しながらも、一貫して個別の詩作品をその内在的論理を慎重にたどりながら論理を展開している。ただし

金時鐘への直接的な聴き取りによって得られた言葉を、歴史的証言として扱う手法に対しては審査委員会において疑義が提出され、論じる主体とその対象との距離について、十分な相対化を経て立論の手続きに入るべきであった。しかしそれは今後の課題として著者が十分に認識しているところであり、本論文全体の評価に及ぶほどの瑕疵ということとはできない。したがって、論理的な一貫性を求める本専攻の審査基準第4項を十分に満たしていると判定する。

⑤当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

詩作品の分析を行う過程で明らかになったそれぞれの詩集の重層的な主題は、これまで注目されてこなかった視点から、詩集の特性と金時鐘の方法論を明らかにした成果である。また、金時鐘が歴史的に受けた痛みを、太古から未来へと連なる壮大な生命の流れのなかで詩想を練り上げたものとする論述は、金時鐘の詩に一貫して流れる生命論的なテーマを指摘したものとして創見に富み示唆的である。また、未刊行のまま原稿が散逸した『日本風土記Ⅱ』の復元作業と、金時鐘関連の文献の整理と目録の作成を行い、その成果が本論文に収められている。その他、金時鐘の詩作品の本文の校異を調査しており、今後の研究の進展に大きく寄与するものと考えられる。したがって、研究の独創性を求める本専攻の審査基準第5項を十分に満たしていると判定する。

以上述べてきたように、浅見洋子氏は、金時鐘の詩作品の詳細な考証によって、その文学的意義を明らかにするとともに、在日詩への実証的アプローチの方法を独自に確立したといつてよい。その成果であるこれら一連の論考および注釈は、今後の金時鐘研究、ひいては在日文学研究の展開に大きく裨益するものと判断できる。審査委員会による慎重かつ厳正な審査の結果、本研究が博士（言語文化学）の学位に値するものと判断するものである。